

風という場所、歩み続ける中で

倉八ほなみ〈2012年度実習生〉

劇団風と出会った実習生の頃、同期の高階ひかりと共に、一つの節目としての卒業公演、マテイ・ヴィスニユック作『戦場のような女』の稽古場で言われた言葉がある。

“違和感を排除するな！ あぜ道を歩け！”

当時の私は、いったい何を言われているのか分からなかったが、何かに対する強い怒りと出来ない自分に苛立ちを覚え、恥ずかしながら、半ば八つ当たり、悔し泣きをしながら半ば意地で稽古を続けた。その問いかけは、若い観客たちと共に公演を創る全国巡回公演をはじめ、風の演劇に向かう姿勢と活動を通して出会う観客や社会、“私”を通し、今も私にぶつかり続けている。

違和感を排除するという事は、他者や世界に触れたとき、その瞬間で捉え感じていたものを、出会ってきたものを、思考する自分を手放してしまうことではないだろうか。

演劇と向き合い、痛感したことは、やろうとすればするほど、頑張れば頑張るほど上手くいかないことだった。そんなときほど、問い続けなければならない。

その行為の中に相手が存在しているか、相手の声が地脈のように体を巡っているのか、出会っているはずのものを手放しているのではないかと。

既存の枠に自分自身を当て込み、間違いを直すことで自分を曲げ、無難な正しい答えや結果に向かって真っすぐに歩いていくのではなく、例え失敗しようと、自身をさらけ出し、不器用であっていい、他者や世界に触れたとき、自らで考え判断し、反発や反抗、痛みや苦しみ、触れたもの、出会った人々への喜びや楽しさや愛しさや希望を持つ自分自身を見つめ続け、立ち続けることが、可能性を生み出していく。

役割に捕らわれず、劇団員全員が企画、運営、プロデュース、公演を行い、影響し合い循環していくという特色を持つ劇団風は、言葉や想いだけではなく、自身にとって、人々にとって演劇とは何かと、行動し、実践し、試み、戦い続けることで生み出していく場所である。

私たちの中に根をはり息づく不可解さや違和感、芸術への探求心、地につき立っているその足で、あぜ道を歩き、出会い続けるものが、今を、これからを、創りだしていく。

不恰好でも不器用でも、赤々といのちを燃やし生きる若い人たち、芸術に向き合うその姿を信じ、手放さず、歩み続けてほしい。